

イギリスの
ドッグトレーニング

広い建物の中は、まるで運動場か公園のようでした。土を敷きつめた長方形のその施設は、ちょうど真中で仕切られていて、向かって右ではしつけ教室とハンドリング教室、左ではアジリティの練習が行われていました。ここはケンブリッジから車で30分程のところにあるウッドグリーン・アニマルシェルターと呼ばれる所です。動物の保護だけでなく、それに携わる人々の教育をすることで世界に知られているのです。

訪れた水曜日は、昼すぎから乗馬療法が行われ、夜7時30分からは犬の訓練の教室があると聞かされた時、ぜひ見学したいとお願いしました。イギリスの犬達はみんなとてもお行儀がよくて、飼い主さんの努力がなければ決してそうならないことを、犬の訓練士である私はよく知っていたからです。昨年より私は日本で何度もしつけ教室を開いてきました。日本の犬の悪評は全て飼い主に責任があると思っている私に、イギリスの人々の犬に対する努力は感じるものがありました。目の前の人々は実に楽し気に一生懸命に犬とつき合っているのだらうと思いました。

始めて間もないクラスの人々は真剣で、日本人とあまり変わらない様子で受講されていましたが、上のクラスの人々は訓練というよりも、犬と遊んでいるという感じでした。でもその内容は、かなり高度で難しいものでした。一つのことができたなら遊んでやり、また次に挑戦していくというやり方は、クラスが下でも上でも同じように組まれていました。

「犬は人間の子どもよりも素直で扱いやすいよ」と、上のクラスのひょうきんおじさんの言葉です。おじさんと犬は、まるで会話をしているように見えました。そこには人間が上で犬が下といった関係でなく、友人のように犬を見ていると思わせるパートナーシップがありました。人と犬とのフェアな関係こそが、イギリスの動物愛護の理想とする考え方なのだと思います。また、人と犬とのよい関係を見つけ出した人達は、その成果をクラフト展などの大きなステージで披露することができるのです。これも日本ではないことです。あくまでも人と犬との共同作業として訓練が存在しているというのが、うらやましい限りでした。

(笠木 恵子)



英国の捨て犬たちを見て

私は愛犬家の一人ですが、アークの会員ではありません。今回の旅行は、クラフト展へ行く機会があると誘われて参加しました。

クラフトは期待以上に素晴らしいもので、私はボーダーコリーにすっかり夢中になってしまいました。

もう一つの目的であった英国の保護施設の見学では、その設備の充実度や清潔さには目を見はるものがありました。しかし、どれほど施設が充実していても、上目づかいに不安そうに見つめる犬たちは、明らかに愛情に飢えていて、その姿は今でも忘れることができません。ペットたちを捨てた飼い主たちのいかなる理由を聞いても、私には納得することができませんでした。

このたびの英国旅行は、様々な面で私にとって有意義なものでした。

(中林 博子)



身体障害者の介助犬。もとは捨て犬だった

合理的なシステムを学ぶ

犬を愛する国というイメージが強いいためか、英国に捨て犬などいるのかと思っていたら、これが案外多いのだそうだ。やはりどこにも無責任な飼い主はいるものである。しかし、その後が日本と全然違う。捨てられた動物は英国内に何百もある施設に救助され、手厚い保護を受け、新しい家庭を見つけることができる。どの町でもさまよい歩く犬の姿を見ることはなかった。

英国で大小さまざまな動物保護団体を見ていくにつれ、施設の充実ぶりに驚くとともに、その運営方法が実に合理的である点に感心した。どの団体も資金は寄付が中心であるが、そのPR方法も例えば「僕の愛はただであげられるけど、食べ物にはただじゃないんです」と犬が言うコピーなどは、さすがユーモアの国だけあってしゃれている。また、遺産の寄付が多いことも興味深い。ウッドグリーンでは、収入のうち約6割が遺産の寄付だという。そのためのガイドブックも作られている。その他にもチャリティ・ディスコパーティーで資金を集めると同時に、啓蒙活動も行なうなど、何かにつけて実に豊富なアイディアに満ちていた。

もう一つ印象に残ったのが、ボランティアに携わる人々である。休日は若い人々や子連れの家族が、平日は仕事を引退したお年寄りたちが交替で動物の世話を当たっていた。誰もが自分のできる範囲で、無理なくしかも楽しんでボランティア活動を行っているようだった。また、それができるような合理的なシステムができあがっている。

英国も現在のような動物愛護先進国となるまでに、おそらくかなりの時間を要したであろう。しかし、日本は英国というお手本があるのだから、良いところをどんどん見習えば、経済力が高度成長を遂げたように追いつける可能性がある。そのために今、日本は動物問題の将来的なグランドデザインを考える時期にきているのでは、などと考えられることが多かった。

寒い風が吹く中、元気に犬の散歩をするボランティアの老人たちの実に楽しげな表情が、私には今でも忘れられない。

(山下 郁子)